

「英語を使える」人材の育成 2

— More Communicative —

外国語 英語科 荒納 郁美

SGHの指定を受け、グローバルディスカッションや総合の授業での模擬国際会議における英語スピーチなど、様々な場面で生徒が英語を使う機会は増えたと思う。それにも関わらず、本校が目指す人間力の1つ、英語運用能力がしっかりと身についてきた…とはなかなか言い難い。指定4年目を迎え、やはりただ英語を使う機会を増やすだけではだめなのだ、というのは皆が気づくところではある。そこで、昨年度に引き続き、「英語を使える」ためにはどうすればいいのか、に焦点を当てて授業を行ってきたので、その実践報告をしたいと思う。

キーワード：More Communicative 雑談力 話し方/聞き方 聞き手の役割

1. はじめに

SGHの指定を受けて4年。また、英語の授業内容の変化とともに、生徒が英語で行わなければならないことは確実に増えた。それにも関わらず、生徒の英語運用能力が伸びたとは自信を持っては言い難い。

細かく言えば、プレゼンやスピーチといったパフォーマンステスト等は昔から行っており（私が本校に勤務しだしたのはたった10年前だが、その前から行われていたようなので）、昔からある程度プレゼン力はあったように思う。しかし、その力は即興のパフォーマンステストになると途端に落ちる。また、私がSGHを受けてから一番気になっているのは、対話を続ける力が伸びていないことである。相手が日本人であろうが、外国人であろうが、英語で会話を続けることができないのである。私は特にこの会話を続ける能力は、会話の機会を与えれば伸びてくると思っていたので、かなりショックのどかいものであった。

そういった事情を踏まえて、今年の4月よりMore Communicativeをキーワードに授業を行ってきた。どういった方法で、生徒にMore

Communicativeへの足掛かりを作ってきたのかを見ていきたい。

2. 会話を続ける姿勢について

(1) グローバルディスカッション

SGHの指定を受けてから、ありがたいことに、金沢大学の留学生を定期的に呼んで会話の時間をもつグローバルディスカッションの授業を行っている。留学生の数は回によってバラつきはあるものの、7人程度で、40人学級の我が校では、日本人6人に対し、留学生1人というグループでその日の題材について話す機会を、2～3学期中で6回得た。確かに、日本人6人对留学生1人という大きいグループであり、たった6回であるが、それでも、日本語のできない留学生たちと題材について英語で話す（特に、題材は日本文化や日本と彼らのホームカントリーとの比較が多い）機会を経ることで、何らかの違いができることを期待していた。

もちろん、違いはでてきたことはでてきている。その中で大きいのは、英語を使うことへのバリアが下がっていることだと思う。英語を使うことへの抵

抗感は続けていくことで確実に下がっている。それならいいのでは？と言いたくなるところだが、昨年度3月に今までのSGHの3年間ならびに3年間のグローバルディスカッションや台湾での異文化研究を振り返った時に、ある同じ反省点が出てきたところが問題だと思っている。

「確かに英語を使うことへの抵抗は減ってきていると思う。しかしグローバルディスカッションを見ていると、いつも留学生がしゃべっている。生徒が率先している姿が少ない。」

いつも同じ反省点である。こうなるのには確かに理由はあった。日本人以外は往々にして沈黙を嫌う。留学生が質問を生徒に投げかけたとする。すると生徒はいくらかの時間をかけその質問を咀嚼し、英語にして答えようとする。その時間を留学生たちが待てないのである。彼らは、質問を理解できなかった、もしくはその質問に答えたくないと思っていると、生徒が口を開く前に、次の質問に移ってしまう。すると生徒は、次の質問に移ってしまったことで、答えられなかったというネガティブな思いと、次の質問について考え、英語を考えることにまた時間を使う。すると留学生がまた違う質問をする。こうして悪い循環が生まれてしまう。もちろん、留学生たちには事前にくらか待つようにはお願いするのだが、生徒たちが本当に英語が分からなかったり、どう答えていいか分からない場合もあるので結局うまく回らない。

(2) 雑談力

しかし、本当にこれだけが理由であろうか？と考えてみると、意外な落とし穴が見えてきた。それは、生徒たちにそもそも「会話を続ける姿勢」がないのではないか？ということである。外国語、特に英語を少なからず話す人であれば、“Do you ~?”と聞かれた場合、“Yes / No.”でだけ答えることはコミュニケーション力がないことを明示することだ、と

分かってもらえると思う。そこに+ aの情報を伝えることでコミュニケーションがとれるのであり、実際に聞き手はその情報を待っている場合も多々ある。

生徒たちを見ていると、『伝えたい』『知りたい』という気持ちがとても少ないのではないかと感じられることが多々あり、だから会話が続かないのではないかと思う。ちょっとした会話だとしても、そこから質問をすることで、会話を発展させる力、英語で話す時にこの力がとても大事になってくる。(この質問をし、会話を発展させる力をここでは雑談力としたい。)空気を読む・ほかす文化の日本語とは違って、英語はしっかりと意見を言う言語である。その為、自分から発信しないということは、興味がないことを示してしまうからだ。

もちろん、トピックの問題もあるだろう。しかし、英語を話せるようになりたい、英語は必要だと思う、と答える生徒がほとんどの中で、英語で話す機会を与えているのに、話そうとしないのは矛盾でしかない。つまり、英語は使いたい、英語を使用する場面でも、日本的なコミュニケーション方法をとろうとしている、英語という言語の特性をしっかりと理解していない、ということの意味していると解釈した。

また、社会に出たときに、聞きたいことだけを聞いて、欲しいものを引き出すことができることのほうが稀だ、ということも確認したい。例えば取引相手との何気ない会話の中にヒントが隠されていたり、何気ない会話を糸口に聞きたい情報へと導く必要があったり。そういったことを英語で行わなければならない人が本校生徒の中にはたくさんいる。そのあたりも認識させる必要があった。

(3) More Communicativeで強調したもの

以上において、今年度の目標をMore Communicativeとし、生徒には次のことに留意するように、折に触れては伝えた。

1. 相手への興味関心をよりもととする態度を

養う。雑談力。(以後『目標1』)

2. 難しい英文ではなく、なるだけ簡単な英文により多く触れる。(以後『目標2』)

3. なによりも発話を多くする。(以後『目標3』)

目標1においては、次の2つを生徒に度々伝えた。

①Listenerの役割の強調(質問の重要性)

②相手の発話へのリアクションの重要性

特に①に関しては、生徒には、生徒たちの会話が続かないのは、話し手よりも聞き手に原因があり、小さなことに気づき、質問をすることの重要性(雑談力)について何度も伝えた。以上を踏まえて、今年度の授業の振り返りを行っていききたい。

3. 70回生(現2年生)

(1) 一年次(2016年度)

まずは、70回生が一年次にどうだったのか、またどのような英語での活動を経てきたのかを見ていきたい。授業においては、英語表現I(週2回)の授業を担当した。

入学直後に行ったGTEC for studentsの結果は以下の通りである。

	スコア	グレード
トータル	530.6	5
リーディング	202.2	5
リスニング	204.2	5
ライティング	124.2	4

全体的に英語はよくできる学年であったといってもいいと思う。ペアワーク等もちろん差はあるが、皆がある程度意欲的に始めから行ってくれる学年であった。

授業においては、ALTがいてくれる週1時間の授業(英語表現A)では、一学期の始めは、シチュエーションを与えてそれぞれによく使う表現等を授業で確認しながら、ペアワークで話してみる活動を取り入れた。その際、授業の最後に生徒に振り返りシートも記入させ、ライティングも取り入れた。(巻

末授業プリントA:トピック⑤)

トピック一覧

①Be an Interviewer
②Perfect Place for a getting together
③Golden Week
④Favorite Subject
⑤What country would you like to visit

一学期後半~2学期始めにおいては、9月末から始まるグローバルディスカッションに備えて、短い英文を読み、その内容を自分の言葉で伝えるRead and Tellの活動を4回行った。グローバルディスカッションは6回行われ、それぞれの授業は、予習の時間(1コマ:Brain Storming for Global Discussion)→グローバルディスカッション(1コマ)→発表(1コマ:Tell what you learned from the foreign students)の3コマで1つの形で大体行った。

また、それ以外の英語を使う機会としては、6月にプリンストン大学の学生との交流、9月に台湾師範大附属高級中学校の生徒との交流、3月に、総合で行った異文化研究の英語発表(台湾現地学習での現地での発表、金沢大学留学生への発表)、ならびに、69回生(当時2年生)の模擬国際会議での各国のスピーチを聞いて質問を行うセッションがあった。

加えて、グローバルディスカッションの中で、生徒の英語を使う姿勢については早期から気づいていたので、12月の特別時間割の中で、グローバルディスカッションを撮ったビデオを用いて、「聞く姿勢」についての確認も行った。

(2) 二年次(2017年度)

それでは、今年度どのような授業を展開してきたのかに移っていききたい。二年次においても、英語表現IIの授業を担当することとなった。その中で、前述の1~3を目標に授業を行っている。

1) 英語表現ⅡAの授業 (ALTとの授業)

週1時間のALTとの授業では、幸運なことに、今年度からALTが2人来てくれることになり、授業を分割することが可能になった。それに合わせて、JETも2人になり、都合4人で約42人を見ることになった。表現活動において、生徒の人数が減ることはとても大きなメリットであり、細やかな指導がで

きることになり、大変好ましい変化であった。

では、実際に何を行ってきたかであるが、まず一学期にはディベートを行った。3人一組になり、まず、適切な表現を押さえさせ、できるだけたくさんのディベートをこなすことを一番に活動を行った。以下が実際に行ったスケジュールである。

April 13 th	Introduction ~ What is DEBATE ? ~
April 27 th	Mini debate
May 11 th	Choose Topic and practice model patterns
May 24 th	First Debate (Two Rounds)
June 8 th	Research
June 15 th	Second Debate (Two Rounds)
June 22 nd	Third Debate (Two Rounds)
June 29 th	Final Debate ~ Choose the most competitive groups ~

最初のディベートでは下調べもそこそこのグループが目立ち、「これはディベートだろうか?」と疑問をはさみたくなるものばかりだったが、2回目からは、かなりのグループがリサーチをしっかりと行い、相手に勝つというゲーム性をとても楽しんで、ディベートを行っている様子が見受けられた。最後の今までの戦績が高かったグループ同士で行ったFinal Debateはとても質の高いものになった。授業後の生徒の感想も好意的なものも多く、2学期末の授業アンケートにおいてもまたやりたいという声が聞こえるぐらいであった。(巻末授業プリントBとC)

今年度の目標1~3の中で、ディベートでは目標2と3の2つを生徒にしっかりと認識させた。生徒はもちろんディベートを経るにつれて、自分たちでも気づくのであるが、目標2を踏まえないと、対戦相手だけではなく、ジャッジ(対戦のないグループ+教員)に伝わらず、目標3を踏まえないと、対戦にそもそも勝てないので、とても認識しやすかったと思われる。

二学期では、プレゼンテーションを2回行った。一回目はPersuasive Speech(Group Presentation),

二回目はInformative Speech (Personal Presentation)とした。ここでも目標2を意識したプレゼンが行われたと思う。

三学期には、まだ予定であるが、ディスカッションを行う予定である。ここでも、目標2と目標3を生徒に確認させながら行いたい。

2) 英語表現ⅡBの授業

この授業は今まで基本的にはライティング指導への足掛かりとしてきた授業であった。つまり、1~2学期をかけて教科書のレッスンを終わらせ、3学期は英作文指導へとシフトしていた。しかし、先に述べたような気づきがあり、私が一人で教える授業ということで一番融通が利きやすかったため、一番 More Communicative に焦点を置いて授業を行うことができた。教科書は啓林館のVision Quest English Expression II を用いている。

授業は表コマ(各レッスンを行うコマ)と裏コマ(各レッスンの単語・表現を用いて会話を行うコマ)とで2時間1レッスンとした。以下がそれぞれのタイムスケジュールである。

表コマ		裏コマ	
10 minutes	①Pair Work (Topic Conversation) Opinions to some news	10 minutes	④Study Points Quiz Repeat after the teacher Do the quiz
20 minutes	②Study Points (Basic Sentences) Repeat after the teacher Pair Work Japanese to English Give a few words and continue	10 minutes	⑤Pair Work (Topic Conversation) Related to the Lesson Topic ⑥Give today' s goal
20 minutes	③Check the answers of the questions on the lesson	15 minutes	⑦Words and Phrases Repeat after the teacher Pair Work Japanese to English Make a conversation with using as many words and phrases on the lesson as possible
		15 minutes	⑧Pair Work Have a conversation on that day's topic

①Pair Work (Topic Conversation)

ここでは、直近のニュースなどからトピックを選び、意見を言い合う。3分間で、お互いが意見を言い合うが、その際必ず理由も述べることも確認させる。その後、クラスで数人に尋ねる。その際、教員側としては、生徒のモデルになれるよう、生徒の答えに必ず質問を投げかけることを心掛ける。(聞き手の重要性)

②Study Points

各レッスンには各レッスンの文法項目を使用した基本例文が10文程度載せてある。実際の会話では難しい凝った文法要素の強い文は使われない。誰にでも伝わる簡潔で簡単な文が必要である。その上で、基本例文はとても便利である。ほんの少し単語を変えるだけで、言いたいことのほとんどが基本例文を使用して言えるからである。生徒にもそのことを認識させ、授業中に基本例文にたくさん触れさせる。

③Check the answer

そうは言っても、文法確認は必要なので、約20分かけて各レッスンの問題の答え合わせを行う。

答え合わせでは、基本的には穴埋め等は答えを与え、和文英訳の時間に大半を用いる。

④Study Points Quiz

②で基本例文の重要性を述べたが、定着がなかなか難しいので、ミニテストを行っている。

⑤Pair Work (Topic Conversation related to the Lesson Topic)

このペアワークのトピックは各レッスンのトピックに関連した内容を持ってきている。そして⑥のその時間の目標へのスムーズな移行を目指す。

⑥Today's goal

最終的に、ある題材について話せるようになることをその時間の目標とする旨を伝える。

⑦Words and Phrases

教科書の巻末に、各レッスンに関連した単語表現集を載せてあるので、それらを確認し、覚えさせる。また、それらをできるだけ使って会話をさせるなどの活動も行う。

⑧Pair Work (Today's goal topic)

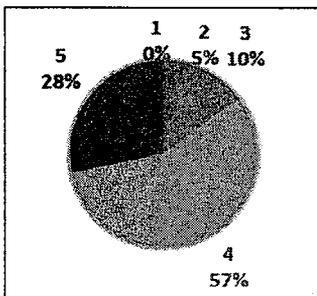
⑥で確認させたトピックに関して会話をさせる。

時間があれば、ペアを2つ合わせ、グループ内発表の時間をとらせる。

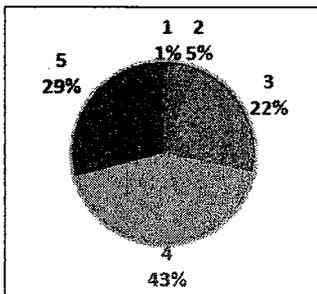
4. アンケート結果・授業評価

2学期末に英語表現に関してアンケートを行い、以下のような結果を得た。解答はYes-Noを5段階で解答してもらった。

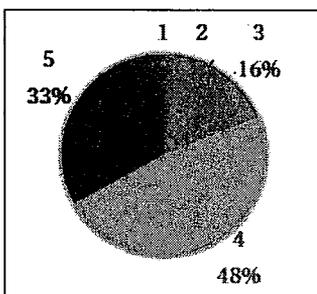
Q1 多少のミスは気にせず、コミュニケーションを図ろうという意識が(より)高くなった。



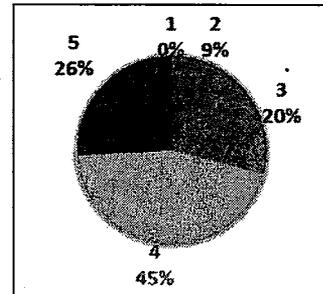
Q2 相手との会話が続くことを楽しいと(より)感じるようになった。



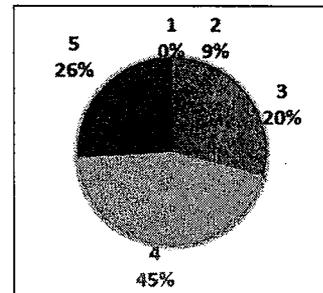
Q3 相手との会話に相槌やリピート、質問等をする事で(より)会話を続けようとするようになった。



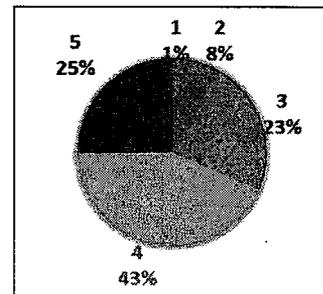
Q4 自分の言いたいことを相手に理解してもらうために、話し方や伝え方を工夫しようという意識が(より)高くなった。



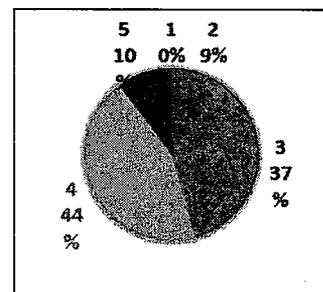
Q5 自分からも積極的に情報提供しようとするように(より)なった。



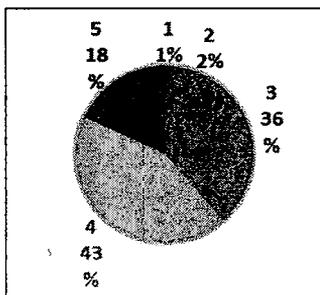
Q6 英語を話すことに抵抗が(より)なくなった。



Q7 英語の力が伸びたと感じる。



Q 8 英語の学習に対する意欲が(より)高くなった。



これらの結果から、

- 1) 教員が感じていたとおり、英語を話すことの抵抗はかなりなくなっていること。
- 2) 話し手、聞き手、いずれの立場からも対話に貢献しようとする姿勢が培われていること。
- 3) 対話において、相手を意識する姿勢が培われていること。
- 4) 英語での会話を楽しんでいること。

が読み取られ、昨年度末危惧した生徒の姿勢が多少なりとも改善したことが読み取れる。また英語での会話をより楽しいと思う生徒が、3を含めると9割以上に上ることも英語教員としてはとても喜ばしい。

授業評価においても、全体として5段階評価で4.0(全教科平均3.8)の数値であり、自由記述欄においても、話す活動には好意的な発言が多い。また、その中でも他者(先生・生徒)とのかかわりの中で学びが深まったかどうかを尋ねる項目では、4.1の評価が出ていることから、ペアワークを通して、学びが深まっていることが読み取れる。

これらから、生徒たちがMore Communicativeになってきていると言っているのではないかとと思う。

5. 課題

英語表現Aと英語表現Bに分けてみていきたい。

(1) 評価方法(英語表現A)

ディベートやプレゼンテーション等のパフォーマンスをどのように評価すべきか、英語力、表現力だ

けではなく、コミュニケーション能力をどのように評価すべきか、まだまだ議論の余地がある。どうしても教員の主観が入ってしまうことは否めず、授業評価でも、当たる教員によって厳しさが違うのではないかという指摘があった。これらは、今後英語科教員一丸となって取り組んでいかなければならない課題である。

(2) 時間の確保(英語表現A)

もっと英語に触れてほしい、英語を使ってほしい、英語を使えるようになってほしい、というのはどの英語教員も願っていることだと思うが、この英語を使う必要がない日本においては、英語にできるだけ自ら触れようとしなければうまくはいかない。

パフォーマンスにおいても、技術的な面や精神的な面は特に回数を経るにつれて上達していくものだ。しかし回数を増やそうにも、まず、初めて行えばその形式を押さえさせ、準備をさせ、発表をさせるという一連の流れをとらなければならない。限られた授業時間の中でそれら全てを工面することはとても厳しく、また準備の時間を授業でとっていても、「これ以上よくはならない」という線はないために、生徒たちは時間をかけ続ける、そうして授業時間外の生徒たちの課題が増えていく。追い打ちをかけるように、他教科でもプレゼンを取り入れるようになり、それらが同時期になると、生徒たちから悲鳴があがりだす。実際授業評価にもその点を訴えている生徒たちもいた。

アメリカでは、パフォーマンスの準備は授業時間外であることが当たり前であったが、パフォーマンス後進国である日本では、これはいつ根差してくれるだろうか。(しかし、生徒の中には、準備は自分で行うものであり、授業時間は発表等により充てるべきだという生徒もいるので、もっとそういった環境が根差していけばいいと思う。)

(3) 現行入試（英語表現B）

生徒がMore Communicativeになっていっており、英語での発話が多い授業を楽しんでいるという結果が出たとはいえ、授業評価を見ると、昔に比べてかなり減ったが、「もっと文法をやってほしい」「英作文の指導をしてほしい」という声が見受けられる。大学入試の英作文においても、かなり基本例文程度の文法要素で書けるものは増えてきているとはいえ、まだまだ凝った文法要素を問う問題もあることは事実である。大学入試がもっと変わっていくことを願いつつ、その中でも文法の指導とスピーキングとのバランスをこれからも考えていきたい。

(4) 文法・語法訂正の難しさ（英語表現AおよびB）

アクティビティメインの授業になると、accuracy（文法・語法の正確さ）をどう担保してやるかが一番の課題ではないかと思う。もちろん、間違いをおかすことを恐れず、発信してみる力はとても大切である。しかし、それと同時に、「会話」においては、相手があり、相手への誤解を防ぐためには、適切な単語、適切な文法・語法は必要不可欠である。しかし、文法・語法に気をとられると、尻込みをしてしまう。その中で生徒が発した発言を文法を直して即時にリピートをかけたり、言い換えをしたりしなければならない。生徒との一対一のペアワーク、数人のグループワークではこういった訂正は比較的安易に行うことができます。しかし、本校の英語表現Bは、42人1クラスであり、その中でペアワーク等のアクティビティを行うと、21組のペアが一斉に話し出すこととなります。そういった中で、机間指導を行うことはとても大変なことです。授業のたびに、あるペアに張り付いて会話を聞くほうがいいのか、机間巡視を行うほうがいいのか悩みながら授業を行っている。

「表現活動を授業で行うべきだ」というのであれば、やはり生徒数は少なくあるべきであり、また、

できればネイティブの先生に常勤で勤務していただけたらと切に願うばかりだ。

6. 最後に

英語を「使える」ようになるためには、様々なハードルを乗り越えていく必要がある。More Communicativeになれば、次は話す内容に焦点が当たり、内容が高度になれば単語も専門単語が出てくることも必須であろう。また、パフォーマンス力のさらなる向上も必ず出てくるはずだ。

こういった中で、生徒たちとどうやって授業を作り上げていくのか。難しい問題であるが、ペアワークをしている時の生徒たちの笑顔が絶えない授業をこれからも目指していきたいと思う。

注

高校教育研究 第68号

「英語を使える」人材の育成

英語科 北野 真理恵

What country would you like to visit?

- Loud Voice
- Smile
- Gesture
- Posture
- Get more details
- One word response
- Repeating
- Question
- Organization
- Facial Expression

★Listening★
Listen to Jim and Ikumi's conversation and catch where they want to go.

Jim

Ikumi

★Activities★

A : If you had time and money, what country would you like to visit?

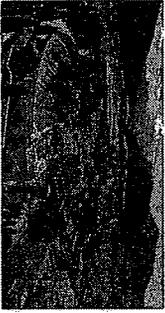
Your Idea
(Who, What, When, Where, Why)

1st partner : Name ()

Your New Idea
Did your partner give you any new ideas?

2nd Partner : Name ()

WHO? ()



TODAY'S GOAL (授業終了後)

1. I was able to talk with partners in a loud voice.		
Loudly and Clearly A	Loudly or Clearly B	Low Voice C
2. I was able to talk with partners with a smile.		
Big Smile A	Smile B	No Smile C
3. I used some gestures in the talks.		
3 and more gestures A	Tried to use gestures B	No gesture C
4. I used good posture when I was talking with partners.		
Good A	Normal B	Bad Posture C
5. I was able to enjoy keeping on talking with partners.		
Our conversation went back and forth a lot A	Sometimes our conversation went back and forth B	Only one person did all of the talking C

WHAT COUNTRY WOULD YOU LIKE TO VISIT? (WITH 2 REASONS)

Class. _____ No. _____ Name _____

Debate Score Sheet (校案プリントB)

[Scale] 4: Excellent 3: Good 2: Satisfactory 1: Needs Improvement

Debate Topic []

Members Affirmative team ()
Negative team ()

Speech 1: Constructive Speech for the Affirmative					Speech 2: Constructive Speech for the Negative				
Speech 3: Rebuttal for the Affirmative					Speech 4: Rebuttal for the Negative				
Organization	4	3	2	1	Organization	4	3	2	1
Eye Contact	4	3	2	1	Eye Contact	4	3	2	1
Persuasiveness	4	3	2	1	Persuasiveness	4	3	2	1
Comments					Comments				
In total () points					In total () points				

Class () Number () Name _____

Final Debate (校案プリントC)

A Basic Format for the Final Debate

- (3 minutes) Affirmative Constructive Speech [Affirmative → Negative]
- (1 minute) Preparation
- (2 minutes) Cross-Examination by the Negative [Negative ↔ Affirmative]
- (3 minutes) Negative Constructive Speech [Negative → Affirmative]
- (1 minute) Preparation
- (2 minutes) Cross-Examination by the Affirmative [Affirmative ↔ Negative]
- (2 minutes) Preparation for rebuttal
- (2 minutes) Negative Rebuttal [Negative → Affirmative]
- (2 minutes) Affirmative Rebuttal [Affirmative → Negative]
- (1 minute) Preparation for defense
- (2 minutes) Affirmative Defense [Affirmative → Negative]
- (2 minutes) Negative Defense [Negative → Affirmative]
- (1 minute) Preparation for summary
- (2 minutes) Affirmative Summary [Affirmative → Negative]
- (2 minutes) Negative Summary [Negative → Affirmative]

Cross-Examination (反対尋問)

反対尋問とは相手側に質問しながらその主張を切り崩していこうとするプロセスです。各チームは、相手側の基調演説 (constructive speech) が終わったあとに、この反対尋問をすることができます。

- (1) 論争点を明らかにする
- (2) 議論を展開する
- (3) 相手チームの議論に反論する

[Scale] 4: Excellent 3: Good 2: Satisfactory 1: Needs Improvement

Debate Topic []
Members Affirmative team ()
Negative team ()

Affirmative Speech 1: Constructive Speech					Negative Speech 2: Constructive Speech				
Organization	4	3	2	1	Organization	4	3	2	1
Eye Contact	4	3	2	1	Eye Contact	4	3	2	1
Persuasiveness	4	3	2	1	Persuasiveness	4	3	2	1
Comments					Comments				
Speech 3: Rebuttal					Speech 4: Rebuttal				
Organization	4	3	2	1	Organization	4	3	2	1
Eye Contact	4	3	2	1	Eye Contact	4	3	2	1
Persuasiveness	4	3	2	1	Persuasiveness	4	3	2	1
Comments					Comments				
Speech 5: Defense					Speech 6: Defense				
Organization	4	3	2	1	Organization	4	3	2	1
Eye Contact	4	3	2	1	Eye Contact	4	3	2	1
Persuasiveness	4	3	2	1	Persuasiveness	4	3	2	1
Comments					Comments				
Organization	4	3	2	1	Organization	4	3	2	1
Eye Contact	4	3	2	1	Eye Contact	4	3	2	1
Persuasiveness	4	3	2	1	Persuasiveness	4	3	2	1
Comments					Comments				

In total () points

In total () points